

令和7年度第5回静岡県産業教育審議会 会議録

日時：令和7年11月26日（水）

午後2時から4時まで

場所：県庁別館9階特別第二会議室

1 開会

本審議会は、会議規則の第3条第2項に、委員の過半数が出席しなければ会議を開くことができないとあり、本日の審議会は、12人の委員中9人の御出席をいただいております。審議会が成立していることをまずご報告申し上げます。なお、横田委員、それから豊田委員にはオンラインにてご出席いただいております。

2 教育部中山参事あいさつ

- ・本日はご多忙にもかかわらず、今回、第5回の静岡県産業教育審議会にご出席いただきまして、誠にありがとうございます。
- ・1月にスタートしましたこの審議会ですけれども、皆様の活発なご審議、また専門部会での検討を経まして、本日、第5回ということで、いよいよ答申案の審議に入ることとございます。本当に皆様のおかげでございます。改めて厚く感謝申し上げます。ありがとうございました。
- ・これまで4回、この本審議会でご議論いただきました。さらに、5回の専門部会、2回の共通部会で協議をいただいて、「専門高校等におけるこれからの時代に対応した産業教育の在り方」ということで、深く踏み込んだご議論を重ねていただきました。
- ・技術革新の進展、少子化に伴う人材育成といった喫緊の課題を踏まえまして、将来の産業を担う人材の育成に向けた、広範、多岐にわたる方向性が明確になってきたと思っております。
- ・特に、前回までの審議では、「育成したい生徒像」の具体化に向け、専門性の基礎、実践、発展の段階的な整理、また人間教育や倫理観といった基盤となる要素について深く議論いただきました。
- ・また、この生徒像と学びの方向性を具現化するために、特定の専門分野にとどまらない掛け算の発想による学科横断的な学びの重要性、また少子化の課題を見据えた専門高校等の適正な整備のあり方、そのような教育の質の持続可能性の両面から大変的確なご意見を賜ったと考えております。
- ・おかげさまで、皆様にいただいたご意見を答申案という形でまとめたことができたと思っております。
- ・本日は、是非、この答申案に基づきまして、委員の皆様から最終的な調整や改善に関してご意見を賜りたく存じます。
- ・本日の審議が本県の産業教育の未来を形作る重要なポイントということになっております、最終的な答申が将来にわたり静岡県の産業界を支える強固な指針となりますよう、本日もぜひ忌憚のないご審議をよろしくお願い申し上げます。

3 事務局説明

- ・まず初めに、事務局から、前回の審議会の報告及び本日の協議について説明をお願いします。

○事務局

- ・まず、前回までの審議会についてです。第4回までの審議会、どうもありがとうございました。委員の皆様にご確認いただきました第4回の議事録については、県教育委員会のホームページに公表させていただいております。
- ・前回は、答申の要となる育成したい生徒像とその学びの方向性の項目について確認とご意見を賜り、誠にあり

がございました。今後の議事録については、審議会の開催ごとに委員の皆様にご確認をいただきたく、お願い申し上げます。

- ・続いて、本日の協議ですが、1つ目は、答申案の第4章各専門学科等における具体的な方策についての報告になります。資料は、答申案冊子の12ページ以降に第4章が記載されております。こちらについては、企業や行政、教員で構成しています共通部会、専門部会で、審議会で方向性が示されました第3章の学びの方向性を基に、各部会で具現化策を作成いたしました。
- ・第5回の専門部会には、各部会に精通する審議委員の皆様にもご参加いただきまして、今回の案が作成されました。
- ・本日は、部会に参加された審議委員から作成にあたっての報告をいただければと思っております。
- ・続きまして、協議の論点の説明に入る前に、答申案の作成の方向性について説明をさせていただきたいと思っております。
- ・次第資料4ページの資料4を見ていただければと思います。そこには、まず、構成ということで、1の構成の通り、全体的な構成を行い、審議委員からいただいた意見の反映、それから文末の意味合いを元に答申案の方を作成いたしました。またご確認いただければと思います。
- ・本日の論点は、委員の皆様からいただいた意見を基に事務局の方で作成いたしました第3章の説明文について、本日はご意見をいただきたいと思いますと思っております。第3章については、教育長から諮問された答申としての核となる部分となります。今までいただいたご発言を基に事務局で作成いたしましたが、内容やニュアンス等でご確認いただき、ご意見をいただければと思っております。なお、次第資料7ページの資料7には、育成したい生徒像と繋がりがわかる対応表をつけてあります。
- ・A3判を1枚めくっていただきますと、9ページには、「第3章 目指すべき生徒像を育成するための学びの方向性」、答申案の第3章だけを抜き出したものになっております。議事の方が進行した時には、こちらを参考にさせていただきながら進めていただければと思います。

4 協議等

(1) 報告事項 第4章「各専門学科等における具体的な方策」について

○川田委員

- ・ただいま事務局から説明がありました第4章「各専門学科等における具体的な方策」についての報告事項から進めてまいりたいと思っております。
- ・事務局から補足事項、ご説明があれば、よろしくお願いします。

○事務局

- ・資料、答申案、先ほども言いましたように、12ページ以降から第4章が記載されておりますけれども、次第資料の6ページに、各専門部会のトピックとなる項目について各部会から3つほどに出したものが、資料6に記載しております。
- ・各専門部会でありますが、大きく分けて3つの項目にまとめられるかなと思います。
- ・1つ目は、デジタル化、最先端技術の対応になります。いくつかピックアップして説明いたします。農業では、スマート農業に対応するため、必修科目で、センシング、データ分析、プログラミングといったデジタル技術の学習の強化。福祉では、介護DXを推進し、介護ロボットやICTの効果的な活用能力を先進的な施設での実習といったものが記載されております。
- ・次に、学校完結の教育からの脱却、それから、地域との連携の強化という面では、水産では、地元企業、大学、

漁業者、研究機関などと連携し、体験的、実践的な教育プログラムを構築する。工業では、産学官連携プラットフォームを構築し、地域産業の魅力を生徒に伝える機会を創出していく。家庭科では、地域や産業界との実践的な学習を通じた就業機会の実施により職業意識の醸成を図っていく。

- ・最後に、学習の質的向上、それからキャリア意識の育成という面では、商業では、「ビジネス基礎」で探究学習の初期指導から3年間の継続的な学習プロセスを通じて課題研究につながる探究力を追求する。工業では、STEAM、NGSS、PBLを強化し、科学的探究と創造的学習の推進が挙げられております。また、農業や工業では、地域のバランスを考慮した拠点校の機能を強化し、地域全体の専門教育の質の維持発展を目指す、こういったものが資料6のところには各部会のポイントとして載せておきました。

○川田委員

- ・先ほど事務局の方からもご説明がありましたが、第5回専門部会には、審議委員の方々にも委員の専門分野でご参加いただいて協議してまいりました。
- ・各部会にご参加いただいた、委員の方から簡単にご説明をいただければという風に思います。
- ・私も工業部会に参加させていただきましたので、最初に口を切らせていただければという風に思います。
- ・10月29日に工業部会に参加させていただきました。印象になりますが、現場に近い先生方のお話を聞くことができ、非常に良かったなという風に思っています。非常に熱心に情熱を持って色々やっていたいて、コーディネーターについてまとめていただいている、科学的探究と創造的学習の授業展開を行っていくということと、実践的・体験的学習の推進を行うということであるとか、あとプラットフォームを構築してコーディネーターを配置して、地域との連携を強めていくというようなことをご議論いただいてまとめていただいたという風に思います。
- ・やはり予算的なところが少し厳しいと思っておられるかな。最先端のところであるとか地域との連携をするところでも、コーディネーターの人件費であるとか、生徒さんをどういう風に移動させるかというところ、やはり予算がかかってきますので、そういうところで苦勞されているなという印象は非常に持ちました。私から以上です。

○横田委員

- ・10月17日に農業部会に参加させていただきました。
- ・こちらのポイントの方に示されている通りではありますが、また工業とは違って、農業高校は、入学者が減っているという現状もある中で、このポイントだけに見られない革新的な意見も随分出ていたかと思います。
- ・大きく改革していかなければならないだろうなということで、この答申もそうですけれども、その後、実際に具体化していくというところでより力を出していかなければいけないというような印象を受けました。

○齋藤委員

- ・水産の方に参加させていただきました。
- ・こちらにも記載されておりますけれども、水産高校は静岡県内に1校しかないんですね。そういう意味で苦勞が随分あるなということです。
- ・新しいことに取り組んでいくということを考えても、施設、設備の問題がありますので、この2番目の丸にあるように、学校完結ではなく、地元の企業、大学、漁業者との連携をするということで、水産高校にない設備は企業の設備を使わせてもらうとか、大学の設備を使わせてもらうとか。あるいは逆に、水産高校にある設備を大学側に使ってもらうとか、そういうことで連携を強めていくということで補っていくということを意識されたことを印象強く受け取っております。

- ・特に、最初の丸のところでは、「陸上養殖」という言葉がありますけども、これからますます必要になってくるのではないかと思います。それに伴う施設の問題もありますし、あるいは電源の問題もあるということで簡単にはいかないですけども、やはり「取る漁業」から「育てる漁業」といいますか、陸上であるということを非常に意識された議論があったかと思っております。
- ・水産ですけども、そこにとどまらずに、やはり大学との連携ということも意識していきたいということでもございました。以上です。

○上野委員

- ・まとめていただいている通りだと思うのですが、改めて申し上げますと、探究学習の初期指導導入とか、継続的な学習プロセスを通じた「課題研究」という形で、地域資源や多様な地域課題という形で、ここに書いてある通りなのですが、商業の悩みというのをここに書いてないことで言うと、やはり商業は、どこのもとも同じですけども、予算的な話であるとか。実態の方ですね。
- ・商業がだんだん総合的になってきているというか、あまり専門的になってきていないところの実態がかなりある中において、資格教育とどう位置づける、どう分けるのかという形で、そこはかなりの課題だなと思っています。
- ・この中には資格教育というのを入れなかったというのは、そういう点もあるのかなとは思っています。
- ・果たして商業の学びとはなんですかというところの、実態面でのより実地的に学ぶためのいくつかの課題、プロセスを通じてやっていくということが1つの最適解なのかなということで、このような形になっていると私は理解しています。

○奥田委員

- ・10月15日に専門部会に行ってまいりました。
- ・まとめていただいた通りなのですが、学校だけで完結できないという点が、どこでも同じだと思うのですが、家庭は今1校しかございませんので、教員の数も限られておりますから、県内にいくつかある学校の教員で協力してということもなかなか現状では難しいものですから、地域の力、それから関係団体の力を借りるということを通して、より家庭の学びには、専門職者としての学び以外に、生活者、消費者としての学びもございますので、それはおそらくその総合学科の中に位置づけられて、1つの学びの視点として持っていただいても、様々な分野に進んでいく上で基本になる学びですので、そういった総合学科との連携ということも考えていければという風に思いました。
- ・福祉については、これこそDX化、ICT化が今現場で大変進んでいっていますので、上級学校においても同じ課題を抱えている状況ですので、まず現場との連携の中で人材育成を進めていくということが欠かせないというところでございました。

○川田委員

- ・専門部会の具体的な方策については、参加された委員の皆様の専門的な視点で確認をいただいたかと思いますが、委員の皆様、何かご発言があればお願いしたいという風に思います。
- ・ここで意見として伺いたいという風に思いますので、ただいまのご報告でありますとか、こちらの資料のところで何かご意見あればお願いしたいです。

○齋藤委員

- ・全体的なところで、どの部会も具体的な方策という中での1つの目標として、例えば資格を取らせるとかは、ここ

には何も書かれていませんが、そういったものがあつた方がいいのかなとは思うのですが、いかがなものでしょうか。

○事務局

- ・今回のこの答申全体は、2章「目指すべき生徒像」。これに基づいて本日またご意見をいただく第3章で、その目指すべき生徒像を育成するための具体的な方向性、それに基づいて各部会、各専門の学科等でこれを行う方向性ということで作成してきております。
- ・齋藤委員がおっしゃられたところをあえて言うならば、第2章を目指して各部会で取り組んでいくことを一応構成上なっております。

○岸田委員

- ・答申(案)の14ページに、「地域連携コーディネーターの配置」というのがありますが、この「近隣自治体や産業団体等に『地域連携コーディネーター』として協力を求め、企業実習や講師招へいのマッチング業務を一元的に担わせる」という形ですけれども、これは、自治体や産業団体にコーディネーターの役割を任せて、彼らが学校といろんな形で入り込んで、そしてどういうことをやっていきたいと思いますかということをやっていくってことを、どこがやってくれるのかわからないですけれども、そこに担わせて、学校側は受け身の立場で、そこが来るまで何もしないという考え方でこの「地域連携コーディネーター」の配置というのがあるのか。
- ・学校側の教育なので、学校側がそういう産業界とか自治体に連携を求めていって、産業界の団体の方に、どういう企業があるのかわからないから、そこに行って、そこが産業界と繋げてくというのはあると思うのですが、これ本当にできるのかなと感じたので、確認したいです。

○事務局

- ・ありがとうございます。非常に言葉が乱暴だと思います。
- ・基本的には、今岸田委員がおっしゃられたように、お互い連携しながら、その中でサポートをいただければというような形でお願いしたいとは思っておりますが、繋げるところで産業界等にご協力をいただきたいというのが本来の意味合いになります。
- ・このあたりの文言についてと、今、岸田委員がおっしゃられたようなところをまた汲みまして、修正をしてきたいと思っております。

○岸田委員

- ・確認ですが、以前にも、産業界のいろいろなところと連携を組まなければいけないですよねという中で、学校の先生がそれを担っていて、普通の業務と一緒にやるのは非常に厳しいので、学校側にもそれをやる専門の方が必要ではないでしょうかという議論もあつたように自分は記憶しています。
- ・学校側にコーディネーター的な役割を、先生とは別に置くということがどこにも書いてないのでよくわかりませんが、学校側の体制がどうなのかが全く見えなくて、産業界とかそういうところにお願ひしますみたいな、それでうまくいくでしょうみたいな形だと、たぶん産業界はなかなか受け入れるのは難しいのではないかなというような感じを受けました。
- ・学校側の体制については、どのようにここに記載されているのかを、最終的な答申案なので確認したいと思います。

○事務局

- ・岸田委員がおっしゃられた、学校側というところは言及されていないのが現実になります。
- ・このコーディネーターというのはまだ実際に活用されていないところで、手探りの面もありますが、実際に今、浜松市等でそのようなところを担っていただくような場面もあるため、今後、そのような先進的な取り組みをしているところを参考に取組んでいきたいとは思っておりますが、このあたり、今おっしゃられたようなところを意識して、文章の方を作成していきたいと思います。
- ・学校の体制等については、見えていないところはあります。

○岸田委員

- ・自分は商工会の会長をやっているのですが、産業界はどちらかというと生徒といろんな形で、企業側も一生懸命やっているので、それは全然問題なくやりますが、逆に学校の方がわからないというか。なので、産業界から各学校に行ってくださいというのはなかなかハードルが高いので、そこを一緒に連携を取ってやらせていただくと多分うまくいくのではないかなと思うので、ぜひ、産業界も含めて、協力は極力やるつもりでおります。ぜひよろしくお願いします。

○事務局

- ・ありがとうございます。私どもも、つなげる役割ということで、学校側が気持ちよくやってくれて、お互い気持ちよくできるような繋がりを持たせるような役割を担っていききたいと思います。そのような意味合いも含めて、修正させていただきたいと思います。

○川田委員

- ・他に何かご意見ございますか。

○横田委員

- ・もしかしたら聞き落としているか、聞き漏らしているかもしれませんが、先ほど、水産学科でも高大接続の話が出ていて、農業部会でも会議の中で高大接続ということが議論されていたかと思うのですが、その辺はあまり前面には出さないような感じでしょうか。

○事務局

- ・例えば、今横田委員がおっしゃったところで言いますと、農業の環境専門職大学との事業連携の部分になるかと思われます。ただ、これはすぐにというわけではありませんが、今回、文末を「求められる」ということで、長期的に見て前向きに検討していくという意味合いで、紙面の方にはまとめさせていただいております。
- ・決して順位付けをするわけではありませんが、農業であるとか水産であるとか、そういったところで記載がありますので、検討を進めていくという形で記載させていただきました。

○齋藤委員

- ・今のお話は、答申案の12ページの「先端設備の活用と高大接続」というところで、共通になっているのかなと思うのですが、このことでよろしいでしょうか。

○事務局

・はい。その中の一部になります。

○齋藤委員

・もう1点だけ。答申案の15ページ。「(6)グローバル化への対応」の1つ目の丸について、「外国人との交流機会の創出」、「県内の企業に勤める外国人技術者」はわかるのですが、「外国人学校との交流」というところのイメージがわからないのですが、これは具体的にどこの学校のことを言っているのでしょうか。日本語学校で外国の方が来られているというイメージなのか、わからなかったのでお願いします。

○事務局

・地域が限定されてしまうのですが、外国人学校というと、西部地区にあるブラジル人学校等を一応指しております。県全体というわけにはいかないですが、地域性がありますが、そのような取り組みをということになります。

○齋藤委員

・もう1つお願いします。次の丸ですが、「海外の提携校等の生徒を授業や部活動に積極的に受け入れ」と書いてあるのですが、この受け入れる場合は授業をやるなら日本語でやるのでしょうか。それとも英語でやるのでしょうか。そこがわからなかったです。

○事務局

・今現在、実施しているところで例としてご紹介しますと、姉妹校であったり、もしくは海外のどこかの高校と連携したいというような学校を専門高校の中でも受け入れをしている学校があります。
・基本的にはその現地の言葉、英語であるとか。英語圏が多いですけれども、基本的には英語で意思疎通を図ったり、日本語もいろいろ相手国の生徒に教えてあげたりというような取り組みをしております。
・そのような生徒たちが日本の学校に来て、一緒に授業を1時間だけ受けたり、部活動を短時間で受けたりけれども一緒に交流したりということをやっているのです、このようなものの拡充といったことを意味しております。

○齋藤委員

・これは、そうしますと、答申案の13ページ、「(2)教員の資質向上」の3つ目の丸ですけれども、「専門分野の外国語活用」というところで、先生方も英語の先生と一緒に英語の勉強しようということと連動するような形という捉えてよろしいでしょうか。

○事務局

・そうですね。事務局では、「教員の資質向上」と「グローバル化への対応」の境で、どちらに含めたらいいかというところも悩んだところなので、第5回審議会が終わったところで、課内でも修正の方向で検討していきたいと思っています。

○川田委員

・ありがとうございます。他に何かご意見ございますか。

○豊田委員

- ・全体的なところになってしまうかもしれませんが、特別支援学校の高等部の生徒さんたちというのは、学校の中で農業を学んでいたりとすとか、工業的なことや方法であったりとか、複雑なものを作られていたりしているのですが、その部分というのは、違う章にもしかしたら書いてあるのかもしれませんが、今回のところに特に示しがなかったのですけれども、どのようにお考えでいらっしゃいますか。

○事務局

- ・福祉との関連については、農業のところでは農福連携というところ、答申案18ページに記載をしております。
- ・18ページ、上から3つ目の丸のところですが、「既存施設を有効利用して、専門高校に特別支援教育の機能や就労支援の活動拠点を併設することで農福連携を図っていく」といったようなところで取り上げさせていただきました。

○豊田委員

- ・実際、私たちの施設とかでは農福連携、うちもやっていますが、生徒さんたちが、この6つの柱でいくと、家庭や福祉の学科の人たちと特別支援学校の組み合わせというのは、実際のところでもかなり学びが深くなると思いますので、農業だけではなくて、もう少し広い範囲で特別支援学校との連携も含んでいただくといいのかなという風に感じました。

○事務局

- ・その点につきましては、第5回審議会が終わったところでご意見の方を反映できればさせていただきたいと思います。

○豊田委員

- ・ありがとうございます。

(2) 協議事項

答申の核となる第3章「目指すべき生徒像を育成するための学びの方向性」について

○川田委員

- ・続きまして、今日の1番重要なところかと思いますが、論点2に移らせていただきたいと思います。
- ・答申の核となる第3章「目指すべき生徒像を育成するための学びの方向性」について、本審議会では、これまで、皆様からご意見をいただいて、「育成したい生徒像」と「その生徒像を育てるための学びの方向性」について議論をいただき、第4回審議会で項目の確認と協議をまいりました。
- ・それぞれの項目について、事務局で内容の作成をいただきましたが、本日は、この内容について、審議会の総意となる内容になるように調整、改善となるようなご意見をいただきたいという風に思います。
- ・それでは、資料のところで、第3章だけ抜き出していた資料あるかと思いますが。そちらを見ていただいて、それにつきまして、ご議論させていただければという風に思います。
- ・次第資料の9ページのところでありますが、これにつきまして、何か今まで見ていただいた中でご意見あればお願いしたいと思います。

○上野委員

- ・なるべく抽象的な話は、避けた方がいいかなと思っています。
- ・例えば、「Ⅰ 社会の急激な変化に主体的に対応できる専門的資質・能力の育成」というところですが、「(Ⅰ)職業に必要な知識・技術等の高度化・複雑化への対応」のところで、これまで話してきた内容に基づいて書かれているということで、基本的には方向性については、相違はないですが、少し気になったのは、「最新技術の基盤となるのは、確かな基礎的な知識と技術である」と、確かにそうかもしれないと思いますが、「確かな基礎」というのは何だろうかと、引っかけます。「確かな基礎的な知識と技術である」というよりは、「基礎的な最新技術の基盤となるような基礎的な知識と技術を習得させる」というような形の文言の方がいいのではないかと思います。
- ・「徹底」とかは別に書いても書かなくてもどちらでもいいですけども、「基礎を定着させる」という形でもいいのではないかな。
- ・もう1つポイントなのは、「基礎が大事だ」というのは我々専門分野でも同じだと思うのですが、基礎ばかりやっていたら、進まないじゃないですか。論文を書いて、「先生、確かな基礎知識がないと論文が書けないですよ」と言っていたら、卒論を書かせられないと同じなので、「確かな知識と技術がないと書けない」と言ったら、いつまでも書けないから書かせるしかないわけなので、あまり脅迫的に言わなくても大丈夫かなと思っています。
- ・基礎のところが大事だということは、途中で書き込んでおけばいいかなと思って、そこだけ文言の修正をされてもいいかなとは思っています。
- ・「徹底的に」というのがしごくことなのかなって思うので、どちらかと言えば、なだらかな言葉でも使えば、基礎が大事だということを書いているということでもいいのではないかなと思いました。

○川田委員

- ・村木委員からご意見をいただいているのは、Ⅰ(Ⅰ)の4つ目の丸のところ、「先端機器に『触れる』、『体験する』機会の創出」の2行目。
- ・「…ものづくりに対する学習意欲」の部分で、一般的に「ものづくり」というと「製造業」を想像しますが、ここでは製造業に対する学習意欲、という意味でよろしいのでしょうか。「先端技術や機器に関していち早く学ぶ姿勢」等と言い換えても良いのかと思いました、というコメントいただいています。これはこのように言い換えてもいいのかなとは思いますが、何かご意見がありますか。
- ・第3章の「Ⅰ 社会の急激な変化に主体的に対応できる専門的資質・能力の育成」のところを見ていただいて、何か気になる点があればお願いしたいと思います。もちろん、全体に対して何かご意見があれば、それも言っていただいても結構です。

○岸田委員

- ・Ⅰ(2)「教員の資質向上」の2つ目の丸です。
- ・「若手教員がデジタルスキルを活かして」と、若手教員がデジタルネイティブとイコールになっていることについて、別に若手教員ではなくても、デジタルネイティブの教員だったら別にその人のスキルを活かせばいいと思うので、わざわざ「若手教員」ということを入れなければならないのか、よくわかりません。

○川田委員

- ・こちらについても、村木委員からコメントがあります。
- ・「デジタルネイティブ教員が…」というところですが、「デジタルデータに関してはセキュリティやネットワークに

関する知識も重要になっているため、スマホやPC操作に慣れたデジタルネイティブ教員だけでは必要な知識がカバーできないのではないかと思います。デジタル教員、IT関連の専門家等としておいた方が、目的に沿った研修ができるのではないかと思います。」というコメントをいただいています。

○齋藤委員

- ・1(2)「教員の資質向上」の1つ目の丸のところです。
- ・「最新技術に対応した指導力を身につける必要がある」というところですが、その最新技術に対応した指導力をどのように身につけてくるのか、ここからは読めないのですが、どういう風に捉えたらよろしいでしょうか。

○事務局

- ・この文面については、企業であるとか大学であるとか、そのようなところになるかと思います。
- ・ご指摘いただいた部分について、また修正等していきたいと思っています。

○川田委員

- ・続いて、「2 県内産業の発展と新産業の創出に貢献できる能力の育成」についても、何かコメントがあればお願いしたいと思います。

○岸田委員

- ・2(1)「地域産業の継承と創造」の3つ目の丸のところです。
- ・「地域企業との共同プロジェクトや長期インターンシップを通じて」と書いてありますが、我々産業界も大学生とは長期インターンシップをやっていますが、高校生との間の長期インターンシップというところのどのようなイメージなのかを教えていただけたらと思っています。

○事務局

- ・高校生の場合、実施期間というのは限られてしましますが、夏休みや春休み、主には夏休み等で、こういう期間が取ればというところは実際に実施する中では想定される時期になります。
- ・連携については、先ほど岸田委員もお話したように、企業とうまく連携を取りながらやればということで、長期インターンシップについては夏期休業中等を想定して実施したいとは考えております。

○岸田委員

- ・その通りかなと思います。「長期」とわざわざ入れて、長期でないといけないような。企業側としては短期でも高校生の方とやるのはありがたいと思っています。実は、短期で大学生といろいろとやっている中で、さらに長期もということをしていて、短期をやらないかというわけではなく、短期もやっている中で、ここではやはり長期だけ入れていく必要があるのかなと感じたところです。

○事務局

- ・短期、1日から4日ぐらいの期間であると、現在、専門高校等では実際に行われているところがありまして、あえて「長期」というところは、1週間とそれ以上の意味合いで「長期」という言葉を入れさせていただいた経緯がございます。
- ・今いただいた意見も踏まえて、表現等を確認したいと思います。

○上野委員

- ・商業の部会でも同じような話がされたケースがあって、結局、学校のカリキュラムも変更していかないと難しいということになります。つまり、クォーターにするとか単位化するとかしないといけないということで、夏季休業中には構わないと思いますが、そうすると夏休みが夏休みではなくなるという例外があって、夏休みに工夫しておいて、実際には学校のカリキュラムの中に組み込んでいくという仕組みにしないといけないという話が出ました。
- ・それは、カリキュラムを総合的に見直すというのは、文科省がやることであって、ここでやることではないと思うので、おそらくそうならざるを得ない事情もあって、N高の存在であったりとか単位化するのであって、今の既存のそのカリキュラム自体を見直さないといけないのではないかとという投げかけになるのではないかとという話は出ました。
- ・そのようなニュアンスなので、インターンシップはそういうニュアンスを伝えればいいと思いますし、実際には短期でもありだと思いますけど、インターンシップに行くのであれば1週間とか行けるといいよねというのはそうなので、その中で、あと学校のカリキュラムとの兼ね合いというのは常に出てくると思います。
- ・それは大学でも同じなので、そこの1つは駆け足的な答申になればいいのではないかと個人的には思っています。

○江頭委員

- ・うちの会社がちょうど高校生のインターンシップを受け入れたのですが、2週間ほど夏休みに受け入れました。
- ・手上げ制で来ていただいたと思うのですが、夏休みが潰れるというのが非常に生徒さんのハードルになっている部分もあったと聞いています。できればカリキュラムの中に組み込まれると、更に参加者希望者が増えて、いいかなというのは思います。
- ・あと、企業側の立場で言うと、毎年この時期に来るよねというのが明確な方が、計画をしっかりと立て、人もアサインできるのと、毎回毎回企業1社で受けるとやはり偏りが出てしまうので、多種多様な企業にお願いした方が生徒のために良いのではないのでしょうか。その場合、先ほど岸田委員からの話のように、コーディネーターがどうあるべきなのかというところが非常に重要になってくると思います。このコーディネーターのところをもう少し具体的にどういう形でというのがあると、実際のアクションに行くときには行きやすいかなと感じています。

○横田委員

- ・少し細かい話ですが、2(1)「地域産業の継承と創造」の1つ目の丸のところです。
- ・「茶業、漁業」と書かれていますが、確かに静岡県はお茶が特徴的ですが、ミカンやメロンも含めていろんな農産物を作っている中で、地域の特徴ということで「茶業」だけを取り立てて出すというのは何か意図があるのかなと思いました。

○事務局

- ・特に意図はございませんでした。
- ・みかんも迷いましたが、こちらは最終的には「など」でまとめさせていただきました。

○横田委員

- ・わかりました。お茶も有機の緑茶に転換したりとか、中にはレモンとかに転換したりとか、いろいろと変わってはきている中で、確かに茶業というのは重要ですが、農業全般の中でお茶だけが目立つというのはどうかなという程度の意見でした。

○川田委員

- ・村木委員からのコメントがあります。2(2)「起業家精神と経営感覚の醸成」の1つ目の丸のところでは、「商業×工業…経営視点を…」というところですが、「異分野連携をしても『経営視点』は得られないと思います。文脈に沿うのであれば、『経営者に必要な多角的な視点』の方がしっくりきます。」というコメントをいただいています。こちらもこのような修正でいいのかなという風には思います。
- ・何かご意見あればお願いしたいと思います。
- ・続きまして、「3 これからの時代に対応できる学科改善の在り方と少子化に伴う専門高校等の適正な整備」のところでは、こちらについて、何か気になる点やお気づきの点があればお願いしたいと思います。

○岸田委員

- ・どこまでこの答申に書くのかというところだと思います。「育成するための学びの方向性」について、これまでどの文章も「教育が必要である」とか、「…が必要である」という形でしたが、この3のところになると、「変更を検討する必要がある」とか、まず検討することを目的に方向性を定めているのがいくつかあります。なかなか難しいので、例えば「学科名の変更を検討する必要がある」というのは、「学科名を変更する必要がある」というような書き方は難しいのかもしれませんが、この答申で検討するということを方向性で示せばいいのか、やはり答申なので、そういうことを必要とするというところで、もう少し強く打ち出すのかというのがよくわからなかったのので、それを確認したいと思いました。

○事務局

- ・ここは岸田委員がおっしゃられた「検討していく」で、止めたかったところですが、答申という意味合いで言い切った形が望ましいのかなというところで、今は「必要がある」と、短期的にやっていくような意味合いで作成してきたところでございます。
- ・確かに言い切ると非常に怖い部分もあるため、今ご意見いただいた趣旨というか思いも含めて、この「検討する必要がある」という岸田委員がおっしゃられるように、この第3章は、そのような部分が多いのは、なんか濁しているところもあって非常に申し訳ないのですが、このあたりは改めて文末等を確認して修正していきたいと思っています。

○新林委員

- ・3(2)「少子化や地域産業を考慮した適正な専門高校等の整備」の1つ目の丸のところでは、「規模適正化を検討する」というのは、具体的にどういうことを検討するのか。

○事務局

- ・「規模の適正化」というのは、1学年のクラス数の規模をここでは表現しております。その後ろにある1学年の定員が240人から320人という5から6クラス程度の人数ということで、規模は1学年のクラス数ということになっております。

○新林委員

- ・1学年のクラス数を、何クラスが適正かというのを検討するということか。

○事務局

- ・基本的にはこの5から6、6から7ですが、それが充実した学びを埋めるラインだということで考えておりまして、その規模が適正であるというところで、この基準を一応設けているところです。

○高校教育課長（中村課長）

- ・外野の方から失礼いたします。高校教育課長の中村です。
- ・今、こちらの方に書かれている規模適正化、1学年の定員が240人から320人というものにつきましては、これまで私たち、県の教育委員会の方で高校のあり方の検討会とかをやっておる。そして、基本計画をその前に作ってきたという背景がございます。
- ・その中で、学業や学校生活を充実した形で送っていくためには、それなりに生徒が色々な生徒と学び合っていく、そういった中ではある程度の規模が必要であると。その時に、これまでの学校の生活を教育委員会の方から見ていると、1学年6クラスから8クラスあった方が充実した学びが送れると。部活動の数も多いし、多くのコースや学科だけではなくて、高校の場合、習熟度別授業を行いますので、そういった中ではコース分けも充実して展開ができるというようなメリットがありますので、それくらいの規模が実は充実した高校生活を送れる、適正規模の高校として位置づけている点があります。
- ・計画であるものですから、ここも、「今検討する必要がある」ということになっていますが、計画に則って、できればこのあたりは、検討を取って、そのような規模を適正化の方向にしていくというような表現にしていければという風なことを考えております。
- ・この点については、また修正しながら皆さんのご意見をもう一度お諮りしたいと思っております。

○齋藤委員

- ・今の話では、クラス数が6クラスから8クラスというお話かと思いますが、それは言ってみれば教員の数が大事だということだと思います。
- ・いろんな科目をやらなければいけない、そうするとその教員の数が必要になってくる。そうなれば、クラス数も多くなるとそれだけの数の先生が配置できないという意味で、ここには、クラスの人数が書いてありますが、科目を担当する教員の数をある程度確保するということがむしろ重要なのではないかと思いますのですが、どうでしょうか。

○事務局

- ・クラス数に合わせて教員が配置されるため、おっしゃる通りの意味合いが込められております。

○齋藤委員

- ・そういう意味では、いわゆる少子化を考えた中で、さらにその規模のクラスを設けていくということになると、どうしてもやはり減らさなければならないという話に繋がっていくのかと思います。
- ・それが後ろの方に、いろんなパターンで再編する必要があるという検討になってくるのだと思います。
- ・答申案の冊子の参考資料11ページに、「4 本県の専門学科設置状況」が掲載されていますが、農業は6校、工業10校、商業12校、多いところはいいのですが、水産1校、家庭1校となった場合に、やはりどういう風に再編していくのかということは非常に問題になってくると思います。
- ・やはり西部、中部、東部に置きたいという気持ちは県としては当然あるのかと思いますが、なかなかそれは成り立たないのかなと思います。そういう意味では、ある程度絞ってどこかに作るのですが、これも大変お金がかか

って難しい問題かもしれません。例えば全寮制に近いような、そういう寮を作るというような発想で、通うのではなくて寮に住んで勉強していくという形にしないとなかなか成り立たないのではないかと考えています。そういう議論はまだなかったかとは思いますが、そこも含めてこの再編については考えていかないと成立していかないのかなと思います。

- ・東部、中部、西部に置きたいというコメントがあったかと思いますが、それが本当に実行できるかどうかというのは大変難しい問題ではないのかなと思います。どこかに集約して、通わなくてもいいような寮生活をして、そこで徹底した教育をしていくということも、今後は必要になってくるのかなと思い、コメントしました。

○事務局

- ・参考にさせていただきたいと思います。

○齋藤委員

- ・第3章の2(3)「グローバル化への対応」について、いろいろと文言はあるのですが、結局、これを実行しようと思うと先生方の負担が相当大変ではないかと思っています。
- ・例えば、2つ目の丸のところ。「技術や製品開発に与える影響を考える教育が必要である」。つまり、考えさせるネタと言いますか、そのような授業展開をしなくてはいけないということになるかと思っています。
- ・1つ目の丸のところ、「地球規模の課題解決にどのように貢献できるかを考え、提案する学習を実施する教育が必要である」。考えて提案させるような指導をしていかななくては行けないと、これはかなり先生方が大変なのかと思っています。
- ・グローバル化ということと、このあたりが一致しているような、一致していないのは、私の中での理解が不十分なのですが、確かに、世界の食糧問題とか環境問題とか、あるいは違う国での価値観ですとか環境の意識がどう製品の製品価値を与えるのかということがありますが、なかなかそれが「グローバル化への対応」なのかなというのは、私の中での理解ができていません。
- ・ここは、特に英語ということは関係がないですか。

○事務局

- ・我々は、この丸の項目をまず1つ題目に取り、これまでの審議会でご意見のあった内容等を文章にまとめてきました。そのあたりのレベル感等についても、各専門の委員の方もいらっしゃいますし、企業レベルで見た時に、高校レベルでどの辺りまでグローバルな視点と、アイデアであるとか、国際基準であるとか、そのようなところもぜひご意見をいただければ、内容等に反映させていただければと思っております。

○川田委員

- ・全体を通して、気になる点について御意見をお願いします。

○岸田委員

- ・他の審議会でも出たのですが、第3章の2(1)「地域産業の継承と創造」の4つ目の丸のところ。
- ・持続可能性、括弧、サステナビリティと書いてあります。サステナビリティで、括弧、持続可能性というのであればわかるのですが、日本語でわざわざ括弧でサステナビリティと入れなければならないという、これが他の審議会でも、逆にわかりにくいというような話がありました。
- ・日本語で、括弧で英語表記をしていくというのは、どういう考え方になるのでしょうか。サステナビリティという名

前がわからないので、括弧で日本語を入れるのはなんとなくわかるような気がするのですが、その逆にしているというのは、何か意図があるのでしょうか。

○事務局

- ・ご指摘ありがとうございます。これは文献で見た形がこれだったため、こちらが正しいのかなと思って使ったのが実際のところですよ。
- ・今ご指摘いただいたところは、確かにアルファベットの後に日本語の説明というのが一般的であって、この場合も片仮名の後ろが日本語というところもありますが、また他の文献等も調べながら、ご指摘いただいたところにつきまして、修正させていただきます。

○岸田委員

- ・他の審議会では、サーキュラーエコノミーというのがあり、そういうのが出ていました。

○川田委員

- ・特になければ、この形で第3章のところをまとめさせていただいて、あと、御指摘をいただいたところを反映させていただく形でいきたいという風に思います。
- ・今日が最後になるため、皆様からお一言ずつ御意見や感想でも構いませんので、お願いします。

○岸田委員

- ・何回か審議会に出させていただいて、最初は私もよくわからない中をいろいろとフォローしていただきながら、皆様のご意見を伺いながら、自分の立場で、分かる範囲でお話をさせていただけたかなという風に思っています。
- ・答申案をざっと読ませていただきましたが、全体的にすごくよくできているなというような私の感想です。
- ・委員の皆様からもありましたように、お金もかかる部分があるのかなと思いますが、やはり今、教育無償化という形で私立の高校へ行きやすくなっている中で、やはり公立高校として必要なものというのが必ずあると思うので、そこはその矜持というものをしっかり認識をしていただきながら進めていただけたらなと思っております。
- ・私としては、今まだ途中かもしれませんが、この産業教育の在り方のこの答申案は、大変失礼な言い方ですが、非常によくできていたというように思っております。どうもありがとうございました。

○齋藤委員

- ・私もいろいろと言わせていただいていますけれども、非常によくまとめられているかなと思います。
- ・1つだけ、もう1歩お考えいただければと思うのが、高校に入って、どういう生徒を育てるのかということを一生懸命考えているのですが、逆に今度は高校にどういう生徒を受け入れるか、つまり中学校からどういう生徒を入れるかいうところもご検討いただきながら、大体各都道府県の中学校は市町村の地元にあるわけですから、その中学校からいかにその地元の高校に入ってもらうのか、あるいはこのような産業のことをやっている高校に入るのかということが非常に問題だと思いますので、中学校に対してどれだけ高校側がPRしていくのか、そのところをご議論いただいた方がいいのかなという気がしておりました。
- ・他は皆さんがご意見を出されて、よくまとめられているかと思います。大変失礼ですけども、十分答申になっていると思っております。引き続きよろしくお願いします。

○新林委員

- ・この席に座らせていただいたのは本当にありがたく思っています。専門家の皆さんのご意見や言葉を毎回勉強させていただいているところでございます。
- ・私は静岡農業高校に勤務していますが、農業関連の専門部会を、本校の会議室でやるが多かったもので、同席させていただいて、専門部会の様子も聞かせていただきながら参加させていただきました。
- ・専門部会では、高校の先生たちがそれぞれの思いをぶつけ合って、いろんな意見を出して、この審議会の方にあげてきた、そういう意見です。他の専門部会もそのようなことだと思います。
- ・そのような多種多様な意見や考えを本当にまとめてくださって、この審議会の素晴らしい専門家の皆さんにまとめていただいたことをすごくよかったという風に思います。本当にありがとうございました。

○上野委員

- ・このような場に居させていただき、いろんなものを読ませていただくという経験と、現場の先生方の話も聞く機会がありましたので、貴重な経験になり、このような機会をいただいたことに感謝申し上げます。
- ・専門部会の先生方とも色々話をする中で、得られたものはかなり多いので、これをどのように私自身が教育の現場に活かしていくのかということが大事ななと思っています。
- ・その一方で、私は研究者でもありますので、書いている論文とかも、結局AIがどういう風な形で自動化されて、さらにはどのように共同していくのかを、フィールドスタディで、専門職である会計士に調査してやっているのですけれども、その中でも浮かび上がってくるのは、専門家もよくわからないというか、一言で言うとみんなよくわからないというのが1つあると思います。そのあたりのところを研究者として探求していくということが、まず1番大事なことでないかと思っています。
- ・いろいろとわからない点はあるのですが、1つ、すごく難しい時代になってきていると思うのは、おそらく現場の方のレベルですが、やはり技術的なスキルというのを習得した気になるような装置がいっぱいあるなという風に思っています。生成AIとか大丈夫ですが、最近の研究の中で、それでかなり若手のスキル不足が懸念されるみたいな論文も見かけました。これはどちらかというと、私みたいなロートル中年よりも若い人の方が深刻な問題として草案が浮かび上がってきて、それに関する論文というのはおそらく早晚ジャーナルにも出てくるだろうなと予感しています。
- ・そのあたりは、若い人が要するに基礎的な技術をスキップして、何で起きているのかというと、医学会で起こっている。ロボットで全部やってしまうと、若い人でも未熟な医者が増えているみたいな、外科医が増えているみたいな、ゴッドハンドがいなくなったみたいな感じのやつがアメリカでも起きているようで、それを問題視するような論文がありました。医学界が最先端を走っているんで、これがどんどん下りてくるわけなので、各工場においては熟練工が不足する。不足するからロボットに変えて、ロボットにすると誰もいなくなったみたいな。会計においても、地道に帳簿を合わせたりとか、いろんなところを確認するという熟練の巧みの作業がいなくなって、みんなロボットでやるという問題も起きてくる。この辺りをどう解決するのかというのは、結構わかっていないところがありますので、こういったこともまた皆さんに提供できるような研究結果を上げられるように頑張りたいと思います。ありがとうございました。

○江頭委員

- ・私も参加前に答申を拝見させていただいた際はDXという言葉は踊っていたけれど、具体的にどのようにまとめるのだろうという状態でしたが、そこからしっかりこの中で議論した内容が織り込まれていたのは素晴らしいなと思いました。

- ・ただ、これが絵に描いた餅にならずに、しっかりと子供たちの教育に織り込んでいかなければいけないと思うのですが、私たちの会社もマイスター・ハイスクールで生徒さんとか先生たちと活動してきて初めて知ったのですが、限られた予算で、先生方がそれぞれやらなければいけないことがある状況で、どのように進めていくのかというような、教育界の課題のようなものを肌で感じました。産官学連携でどうやっていくのかというのを、どこまで書くかですけど、「できればお願いしたい」というスタンスだと、企業側も「はい、やりますよ」となかなか言わないですし、どうやっていくのかというのは、ある意味バシッとある程度は書いた方が進みやすい部分もあるのかなというのが今日の感想です。
- ・もう一つは、最後、斎藤委員からもありましたけど、できれば、家庭もそうですし、水産もそうですけど、1校しかないところは統合することも難しい中で、お金の関係があるかもしれないですけど、強豪校みたいに、他県からでもぜひ学びたいと言ってもらえるような学校にしていけるのが、理想的かなと思います。そうあるためにはどうするのかという、答申になると思いますので、短期的な部分と長期的な部分というところで、残りわずかですけど、しっかり審議ができればいいかなと思いました。

○奥田委員

- ・初めはどうなるのかなと思って、多岐に渡っているものをどのようにまとめるのかというのが心配でしたが、とても綺麗にまとめられてきて、この間の皆様のご努力と、大変な時間と労力をかけられたのだなということが、とてもよくまとまっていて、感心いたしました。
- ・私は読んでいて、今日のお話を聞いていても、やはり気になったのは、コーディネーター機能というのを、誰がどうやって担うのかというところが、絶対必要だというのは合意だと思うのですが、それをどちらが持つのか。企業側とかその外部側が担える部分はもちろんあるんです。人を出しなさいと言われたら、出せる部分もあると思うのですが、実際、高校にどうアクセスするかというところがすごく壁があって、我々大学ですから比較的学校同士で近いはずなのですが、具体的に高校生と大学生が福祉現場の職員と関わるイベントをやりたいんですけどもどうですかというのを持っていくのに、誰に持っていった方がいいのかがまずわからない。では、教育委員会に持っていった方がいいのかと言っても、教育委員会も、「いや、自分たちではないです」というところがあって、その意思疎通を、せっかくいいアイデアがあってもどこに持っていきけるのかがわからなくて、お互い持っているリソースをうまく使えない状況なのではないかというところが、この答申案でどのように解決されるのだろうかというところがとても気になっておりましたので、もう少し踏み込んでそれが盛り込まれることを願っております。ありがとうございました。

○横田委員

- ・私も参加させていただいて、非常に勉強になったと思っております。
- ・特に、農業の学科関係の大学ですと、まさに専門学科との共通の課題があり、そして共同して取り組まなければいけないところや、解決しなければいけないところというのは非常に実感されたということで、本当に勉強になりましたし、これから実際に動いていく中で一緒にやっていかなければいけないという風に思っております。
- ・皆さんが言われていますけど、体系的に整理していただいたというのが非常にありがたいところですが、少しわがままを言うと、デジタルAI技術というのはどの専門学科でも決まって必要になってくる中で、全体として文章が工学系に寄った文章になっているのかなというところで、農林業色、あるいは先ほど言った、技術ではなくて技能的な側面というの、この文章の中に盛り込んでいただけるといいかなという感じがいたしました。わがままかもしれませんが、最後、よろしくお願いいたします。

○豊田委員

- ・参加できない会もありましたが、ありがとうございました。
- ・私からすると難しい問題が結構あったので、お役に立てたかどうか分からないですけれども、全体的に各分野の意見がまとまって良かったなというところは感じました。
- ・今、不登校の生徒さんをかなり見るのが現状でして、なぜ不登校になっていってしまうのかなっていうところも少し考えて、実際のプログラムというかカリキュラムなのかは、魅力のある高校を作っていくと、どんなにいいプランも、どんなにいい方向性を持っていても、そこに生徒さんたちが集まって来なければ、深い学びにも繋がっていかないのかなという風には感じます。その辺り、最終的にはいい形で落とし込めるといいのかなというところで、今日、上野委員から話があったように、カリキュラムの根本的な見直しであったりとか、もう少し経験知、AIとかを使っていくのはいいと思うのですが、AIは感情を持っていませんので、実際私たちは生きている人間ですので、辛いとかきついとか楽しいとかを経験できる、そういうところも学びの中にしっかりと閉じ込めるようなカリキュラムが今後反映されるといいのかなという風に感じました。本当にありがとうございました。

○川田委員

- ・皆さん、本当にご協力ありがとうございました。今日で終わりではありませんので、しばらく最終のところいろいろと続きますので、ぜひよろしくお願いします。
- ・私の拙い司会でなかなか難しいところもありましたが、事務局が皆さんから出された意見をよくまとめていただいて、いろんなことを盛り込んでいただいたというのは印象として持っています。
- ・私が思っているのは、現場の先生方が非常によく頑張っておられて、いろんなことを一生懸命やられているので、ぜひ大学の先生であるとか、あと企業の方とかおられるので、サポートができるといいなという風に思っています。

5 その他

○事務局

- ・今後のスケジュールについて次第資料の13ページをご覧くださいと思います。
- ・本日が11月26日水曜日、第5回の産業教育審議会を開催いたしました。
- ・今後ですが、本日いただきましたご意見、それから修正点を踏まえ、事務局の方で答申案の方を修正いたします。その後、委員の皆様にもまたお送りいたしまして、書面決裁の方をさせていただきたいと思います。そこで修正点等がなければ、そのまま決裁をいただきたいと思います。新たにそこで修正点が多少ある場合には、最終的には川田会長に確認していただき、決裁を川田会長に一任していただければと思っております。それにより、この答申案の、案が取れまして、答申という形で完結させていただきたいと思います。
- ・その後ですけれども、手交式を行いたいと思っております。手交式については、川田会長に出席いただきまして、諮問をいただいた教育長に対して答申を渡していただくという式を行いたいと思っております。日程等はまた最終的には川田会長と合わせていきたいと思っております。
- ・このような形で今年度、答申の方を施行まで進めていきたいと思っております。
- ・来年度に入りまして、8月ぐらいにはこの進捗に関する審議会を一度開かしていただければと思っておりますので、またその時期にはご予定等の確認をさせていただきたいと思っております。
- ・今後のスケジュールについては以上です。
- ・本日は、修正点の中でも特に「コーディネーター」を誰が担うのかということや位置付けについて、大きな課題をいただきました。インターンシップについても、長期に生徒の時間が奪われるとカリキュラムに入れる。実際に、デ

ュアルシステムというような事業の中で、企業にお世話になって、事業を進めていくような取り組みもありますし、この審議会の中でも、第3章の3の項目のところにおいては、少子化を課題として解決するのがメインではない。岸田委員からも、これはあくまでも魅力化であったり、子どもたちのためにこうするべきだ、それが少子化の課題に対応していくといったような意味合いも含めて、我々の方で文章の作らせていただきましたので、審議会でいただいた趣旨というか、委員の皆様方の思いも今一度考え直して、事務局の方で確認して、本日いただいた修正点も含めて修正して、決裁をいただきたいと思っております。また少しお時間いただければと思っております。

・以上を持ちまして、令和7年度第5回静岡県産業教育審議会を閉会させていただきます。本日は誠にありがとうございました。